

# 核兵器は地球を守れるか？

村尾 陸

日本人であれば、原爆は悪の権化だ、都市一つを一瞬で灰にする破壊的なものだと言うことは、戦争世代でなくとも家庭や学校で教わるものだ。テレビなどのメディアで断片的に見聞きもする。修学旅行で広島・長崎を訪れて勉強の機会を持つ人もいるだろう。しかし、私は原爆が破壊した「実際」を29歳になるまで知らなかった。権利について考える機会を持った私は、被爆者の権利闘争の歴史を理解したいと思った。そして、広島の原爆記念館を訪れて、改めて核兵器は人類の手に負える力ではないということを理解した。それは人が持つべきものではないし、ましてや絶対に人に向けて解き放って良いものではあり得ない。いかなる理由があれ、これを人に向けて発射したアメリカの判断は理解することができない。

1945年時点、世界には2発(から5発程度)しか原子力爆弾が存在しなかったという。この2発は広島と長崎に投下され、両都市を焼け野原にし、広島で約14万人、長崎で約7万4千人の死者を発生させた。途方もないエネルギーである。しかし、この核兵器が、世界が軍縮に向かう前の最盛期には70000発あったというから驚きだ。しかも、核兵器の研究は戦後も活発に進められ、その1発の威力は1945年に実用されたものの約600倍もあると言うのだ。地球全体を焦土と化すのに十分の量の核兵器を人類が所有していたことになるだろう。そして、軍縮が進む現状でも同様かもしれない。上記のデータを見て、核兵器が地球を守ると言うビジョンが見えるだろうか。答えは明白である。それでも核兵器を国家が保有する理由は、抑止力のためであると主張されている。人類は核兵器を発明しまった。そして、核兵器を世界征服を目論む国家や独裁者が保有してしまった場合、私たちはそれに対抗するための手段を台頭の武器を保有し、牽制し合うしかないと言うのだ。確かに、この論で言えば、人類が核兵器を産んでしまった以上、悪に対抗するために正義もまた核を保有し続ける必要があり、人類文明はその終焉まで核と隣り合わせになるかもしれない。しかし、核保有国であることで国家の実力を担保したいというのが現在の核保有国の本音だろう。人類の歴史は戦争の歴史である。世界史を鑑みれば、現在の国際社会は洗練されている、つまり人権を尊重する風潮を醸成しつつあるし、武力行為には国際社会として反発する体制が出来上がりつつある。だが、残念ながらいまだ世界では各地で戦争や紛争がなくなるのも事

実である。核保有国は分をわきまえてはいるだろう。1945 年以來、武力行為として核兵器が使用されたことはない。だが、ビキニ環礁における水爆実験のように戦後も人や自然に被害を及ぼしている。また、キューバ危機に見られた究極的な武力行為として核兵器の使用が常に提示されている世界となっている。その度に世界は人類の危機を想念する。

核兵器の誕生によって、国家はそれを「正しく」使用しない国家や独裁者の横行を抑止するため、本質的には国家の軍事力や国際社会における威光を誇示するための飾りとして核所有を正当化してきた。一部の体制反発的国家は国際社会の証人を無視して核所有を推進している。核兵器の圧倒的実力のために、核所有における倫理的譲歩は実現しにくい。一部の国家だけが核所有を認められるのは差別であり、全ての国家が核廃絶するのは抑止力的観点から「危険」なのである。ただ、核保有国であるロシアはウクライナと戦争をしているし、各地で戦争が絶えない状況の中、核兵器が戦争抑止力として機能しているとは言えないだろう。現状、核兵器は人類、地球環境を脅かすだけの存在にすぎない。人類は核エネルギーという蜜の味を知ってしまったかもしれない。だが、核が私たちに与えた影響を為政者や開発者はより客観的に、自分の身になって理解すべきであると思う。核の与える事実の例は広島と長崎にある。人類の未来を切り開くのにその力は必要だろうか考え直す必要がある。

以下に私の結論を述べる。核兵器は地球を守れない。地球の指す意味が人類社会であれ、地球環境全体であれ同じである。核兵器にできることはそれらを完膚なきまでに破壊することのみである。戦争抑止力としての必要悪であるとの抗弁に対しては、現状の世界情勢を鑑みて戦争を抑止できているとは言えないことから反駁できると考える。また、核保有国が核廃絶をしない結果、一部の独裁国家が新たに核兵器の開発を進行してしまっていることから、核の所有は戦争の抑止とは逆方向の結果を産み出しつつあるとも言える。これも地球にとって悪影響以外の何物でもない。核兵器は地球にとって、究極の不要悪である。